

開けよう、バルブの女性史という弁を

—女性的なバルブがもつ「おしゃれでカワイイ」バルブの可能性—

本 穂波*

1. はじめに

筆者は女子大生であるが、正直バルブに何の興味もなかった。筆者にとってのバルブの印象は、車・飛行機・機械・船など、いかにも「男性らしい」もので、「関係なさそうなもの」だった。

このように、バルブは一見、男社会の中に存在するものに見える。しかし実際には、女性史における女性の社会進出の大きな転機に二度も関わり、力を発揮した。ここでは、歴史的にどのようにバルブが女性と関わりあってきたかを解明した上で、バルブ業界での女性的な視点の重要性を考察する。

2. 明治時代の製糸工場拡大とバルブ製作

明治の製糸・紡績産業の発達は、日本のバルブ普及を考察する上で非常に重要な時期である。明治政府は開国以来輸出の中心であった生糸の生産拡大で、貿易赤字を解消しようと考えていた¹⁾。そこで富岡製糸場を出発点に、全国各地で製糸工場が建設された。

このような製糸工場の拡大を可能としたのはバルブである。製糸は煮繭しゆけんという生産過程で蒸気が必要とするため、製糸工場を全国に拡大するためには、バルブが不可欠であった。しかし、当時日本のバルブのほとんどは輸入品であった。そのため、国産バルブの製造が急がれた。そこで尽力したのが彦根の門野留吉によるバルブ製造である。彼の仕事によって国内で安定的にバルブが製造できるようになり、製糸工場が全国に拡大・発展することが可能となった²⁾。

3. 女性初の社会進出とバルブ

ただ、門野留吉による国内製バルブの普及は、製糸工場が全国に拡大・発展することを可能としただけでない。それは、女性の社会進出の足がかりとな

ったのである。というのも、江戸時代まで糸を紡ぎ、機を織ることは家庭内で行う女性の仕事であった³⁾。しかし、明治になり富岡製糸場ができると、全国から集められた女性がここで働いた。この後、地方にも製糸工場が次々と誕生し、またしても女性がそこで働いたのである。こうして、明治から昭和初期までの間、日本の雇用労働者の大半は女性となった。このような製糸工場の拡大は、女性の機織の仕事が家ではなく、工場で行うものへと変化させたのである。門野留吉の仕事はその根本的な要因を作ったと言ふことができ、女性にも大きな意義を持つものであった。

4. バルブを必要とするモノ

—洗濯機—と女性の関係

更に、バルブを必要不可欠とするモノが女性の社会進出を促進した例もある。その代表的なものは洗濯機であろう。近現代女性史において、女性の大きな転機となったものの一つは間違いなく洗濯機である。洗濯機も前述した製糸工場での女性労働と同様に、「女性解放」「女性の社会進出」の代名詞である⁴⁾。洗濯も機織と同様、女性の仕事として認識されていた。戦後まで洗濯板を使った洗濯が主流であった日本では、洗濯は「お洗多苦おせんたく」と揶揄されるほどに過酷な労働であった。洗濯機は女性の家事の負担を肉体的に解消しただけでなく、家事にかかる時間の短縮にも貢献している。そのためか、筆者が年配の女性に「今までで一番うれしかった買い物は何か」と問うと、洗濯機と答える人が多いのである。

洗濯機の普及は女性史に二つの大きな意義をもたらした。一つには、炊事をしながら洗濯など、家事の同時並行が可能となったことである。そのことは、家事のあり方を根底から変え、家事の時間と苦痛を激減させた。もう一つは、洗濯機の物珍しさから、洗濯は夫がするという例が増え、男性の家事参加の

*金沢大学 国際学類 国際社会コース4年

きっかけとなったことである。これら二点の結果、女性たちが以前よりずっと早く家事を終わらせられるようになり、浮いた時間を他の生産活動に費やせるようになった。そのことが女性の社会進出を容易としたのだ⁵⁾。言うまでもないことだが、洗濯機はバルブと切り離せない関係であり、かつ、バルブを用いた家電製品として代表的である。洗濯機を筆頭に、バルブは我々の日常で使うほとんどの製品で大活躍しているのだ。以上から、バルブはまたも女性史上の大きな転機に影ながら関わっていたと言える。

5. バルブ業界のこれから

以上、バルブは女性と密接に関係し合っているのだということを述べてきた。しかし、現実にはバルブは常に「男性的」イメージが強く、女性には取付きにくいもの、関係のなさそうなものとして捉えられがちである。筆者もバルブについて調べる前は、バルブから連想するのは、重工業・機械的・無機質など、いかにも男性的なものばかりであった。このような認識を抱いているのは筆者だけでなく、バルブ業界の人々においても然りである。実際、バルブ業界で働いている人の多くは男性である。更には、バルブ業界は圧倒的に「くん」で占められている。例えば、実際に販売されているバルブの商品名を見ても「無鉛くん」「おっぞんくん」「アイエス工業所のバルブくん」「満弁くん」「ピタットくん」など男性の名前がつくことが多い。確かにイメージキャラクターの「ばるちゃん」は女の子だが、実際に出回っているバルブ商品のほとんどに男性の名がついているのだ。ここから、バルブ業界の人々さえもがバルブに男性的なイメージを抱きがちであることが分かる。バルブと女性の緊密さを、まずはバルブ業界が広く認識する必要がある。

バルブ業界でバルブと女性の関係性が認識されていないのは、非常に残念なことである。生活面で実際にバルブの恩恵を受けているのは女性であるにも関わらず、それを作り出す現場が「男性的」という矛盾が生じているのだ。そのため筆者は、バルブ業界がもっと「女性らしさ」を取り入れていくべきであると思う。その理由を三つ挙げたい。

第一に、女性のニーズから新たなバルブの需要が

生まれる可能性が大いにあるからだ。前述した製糸工場や洗濯機の例から、バルブはこれまでも女性を助け、女性史における大きな転換点を作り出している。そしてそのいずれも、新たな産業に繋がっているのは偶然ではないだろう。

第二に、女性的な視点の大切さである。私達は日常、バルブを備えたモノを頻繁に使う。水道栓や洗濯機がよい例であろう。身近な機械製品など日常のモノは女性が使うことが多い。そこで、女性という視点を取り入れることで得られる新たな視点や転換は、きっとあるはずだと筆者は考える。

第三に、今後は必ずしも高い技術が売り上げに繋がるとは限らないからである。男性が商品に求めるのは、スピードや高性能であろう。つまり、高い技術を求めるのは男性的である。一方、女性は技術面よりもデザインや使いやすさを求める。これまでのバルブの技術力に女性の柔軟なアイデアが組み合わせれば、より良いものが生まれるはずだ。

以上の三点から、バルブ業界に女性の力を取り入れることが重要である。具体的には、女性をより雇用することが有効な手段である。それによってバルブがおしゃれで、かわいくなる可能性さえも考えられる。

おしゃれで、かわいいバルブがあれば、バルブの可能性が広がるかもしれない。写真1は筆者が公共施設で実際に撮ったものである。特に学校のトイレを中心にこのような注意書きをよく見かける。とい

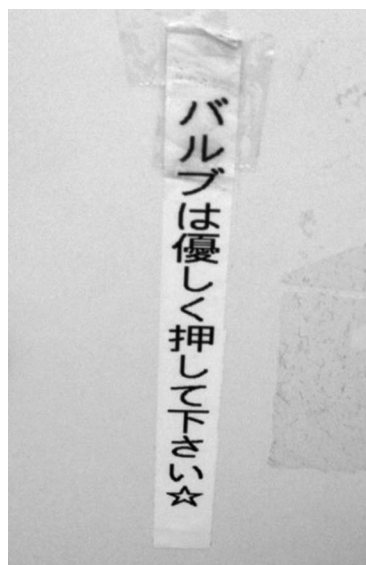


写真1

うのも、和式トイレのバルブは足で踏まれることが多く、すぐに壊れてしまうのだ。こんなにも痛めつけられるバルブは他にないのではないかと同情する傍ら、では、踏まれないバルブを取り付けられないものかとも思う。例えば、踏んでしまうにはもったいないような、かわいい柄や形のバルブである。これは、トイレのトレーニング中の赤ちゃんにも一役貢献できる可能性がある。あくまで一例だが、これまで「影の存在」「縁の下の力持ち」とされていたバルブが、これからは目立っても良いのではないだろうか。

バルブはすでに幅広いニーズにこたえるだけの力を備えている。今後は女性らしいアイデアから、

おしゃれでかわいい、新たなバルブが作り出されるのを期待する。

<参考文献>

- 1) 石月静恵『近代日本女性史講義』世界思想社, 2007, p.52
- 2) 前田裕子「日本における水栓金具の工業化」『神戸大学経済学研究年報』50巻, 2003, p.55, 56
日本最初の国産バルブの記録は1877年に京都府勸業工場の伏水製作所で作られた蒸気機械用真鍮カランなどであるが、この工場は四年後に閉鎖され、詳細は不明である。一方、門野留吉氏によるバルブ製作はのれん分けによる技術の伝承が行われたために、同氏によって彦根を中心に国内のバルブ生産が活発化したと言う事ができる
- 3) 石月静恵『近代日本女性史講義』世界思想社, 2007, p.51
- 4) 「女性解放に貢献したのは洗濯機」, バチカン紙
<http://www.afpbb.com/articles/-/2579905>,
2013年11月21日閲覧
- 5) 天野正子, 桜井 厚, 『「モノと女」の戦後史—身体性・家庭性・社会性を軸に』平凡社, 2003, p.170, 171